

いま学校にできることについて

—遠距離恋愛のごとく子どもを想うことから—

石井英真（京都大学）

このたび、全国でオンライン化の動画作成やコンテンツ開発が盛んになりつつある状況（子どもに届いているかどうかは別）を見て、オンライン化について思うところがあり、「いま『授業』を問う」という小論をまとめました。

しかし、学校の置かれている現状は、自治体によって、地域によって、公立と私立によってなど、差が大きくなっています。多くの学校は、オンライン化の条件も整っておらず、教科書と課題だけ手渡して、身動きが取れていない学校も少なからずあります。特に公立学校において顕著な身動きのとれなさには、複合的な要因があります。

現時点では、タブレットの未整備、家庭の情報環境、各自治体の回線のキャパや一括管理システムにも由来する、ハードな条件面の問題が注目されがちです。しかし、それらは予算や時間ばかりかかりますが、いずれある程度は克服されていくでしょう。より深刻なのは下記のような状況です。できるところから始めようとして、LINE や youtube なりを使おうとしても、何か一つ問題が起こったら、それらを使うことを前提にセキュリティなどの問題を考えるのではなく、LINE 使用という選択肢自体を放棄する。あるいは、家庭訪問して配布物を配ろうとしても、それで感染を拡大するのではないかという一部の声が上がるとすべてを中止してしまう。つまり、挑戦のためのリスクを取らない、というか取れなくなってしまった、コロナ以前から続く学校の萎縮と硬直化こそが、最大の障壁ではないかと思います。これらは、時間だけでは解決しがたく、学校に本当の意味での挑戦の自由が担保されないと感じてしまうでしょう。

ずるずると延長される休校に、準備してはご破算にされる状況で、先生方も疲弊し、あるいは、「自分たちでは何もできない」と諦め、思考停止状態になっているようにも思います。そんな中、オンライン化については、オンラインで授業を再現しようとするのではない形で、学習者目線でシステムの確立を急ピッチですすめつつ、また、そうしたオンライン化などを一つの切り口にして、学校の息苦しさに風穴を空けるような取り組みを多方面から進めながらも、今、学校の取り組みとして一番大事なことは、副題のフレーズでまとめられるでしょう。遠距離恋愛のごとく子どもを想うことから始め、心を通わせるために手を尽くす。それで子どもも保護者も教師も「こころの温度」を上げていく。

プリントだけ渡されて音沙汰がなく、保護者からは学校現場の苦勞も見えず、不信感だけが募るという状況は一刻も早くなんとかしないといけないと思います。学校、特に公立学校への信頼がもとに戻せなくなるのではと心配しています。

公立学校の強みを本当に生かす上でも、それぞれの学校レベルでむしろアナログに、それぞれの子どもや家庭に丁寧に「安心」を届ける取り組みが大事なのではないのでしょうか。たとえば、文通のようなやり取りから始めたり、「あのね帳」的に子どもたちの日記や作文を集めて文集にして、学級通信の紙の上での交流を重ねたりする。通信添削のように、ドリル的な課題も添削して花丸や一言コメントをつけて返したり、数問程度、考える過程を表現する問題に取り組むように促して、その考え方をプリントにまとめて紹介したりする。オンラインでなくても、リアルタイムでなくても、まずは紙の上で、教師と子ども、子どもと子どものつながりも作っていいのではないかと思います。

オンライン授業の一つの課題として、毎日が授業参観となり、下手をすると、パフォーマンスや見

栄えのよさに目が行きがちで、保護者の消費者感覚的なまなざしが強まることで、教師が委縮する

ことなども起りうると思いますが、逆に、子どもたちのナマの声や考え方が綴られたワークシートや作品に保護者が触れる機会が増えることで、さらには、保護者の声も載せたりしていくことで、そうした、固有名性の高い双方向的なアカウントビリティによって、信頼や連帯を構築しやすくなるかもしれません。

一週間に一往復でもよいので、心を通わせる工夫があるといいなと思います。遠距離恋愛でたまに来るお便りを待ち焦がれる感じになればしめたものです。作文もだれかに見てもらいたいから書く気になるのであって、学びの宛名があることが大事だと思います。特に、親や教師以上に、クラスメートという宛名が持つ意味は大きいし、学びや生活の励みにもなるでしょう。それができなくても、朝の会的に子どもたちに電話して声を聴くだけでも子どもも保護者も安心すると思います。入学式や始業式もできていないからこそ、子どもたちはどんな先生なのか、そしてクラスメートとの生活や学びに思いをはせる、逆に、先生も子どもたち一人一人の顔やキャラクターが知りたいと思う。お互いに触れあいたいと思うのであれば、あの手この手を考えて、顔が見えないなら、まず書かれたものから、書いたものも交換できないなら、声を聴くところから、そうやってつながりを作る道を模索する。そして、そうした想いから生まれるつながりこそが、学校に行きたいな、一緒に勉強したいなという子どもたちの想いにつながるのだと思います。そういう想いを強くしていくことが、最優先でなされるべきだと思います。

「こころの温度」という点からすると、オンライン授業をするにしても、どこのだれかわからない人の授業ではなく、失敗しながら泥臭くてもいいから、担任が、コミュニケーションの一環として素朴な授業を届けるという視点も必要だと思います。オンライン授業のクオリティという点では、むしろ民間で作られたものもすでに多く存在しますから、今無理してそこで張り合うのではなく、もちろん各自自治体が組織的に整備を進めつつあるものも含め、既存のいろんなコンテンツもうまく活用しながら、でも、要所要所で、知っている先生とクラスメートとが一緒に過ごす機会を持つ。そんな匙加減ができるとういと思いますし、そうして、後々新たなハイテクなりソースをかぶせられる、心のつながりと学びのシステムをこそ、オンライン環境を整備している間に整えておくことが必要なのではないかと思います。

保護者は学習面のフォローもそうですが、生活リズムを心配していますし、何より「安心」を求めています。全員に同じ扱いができなくても、その子や家庭の状況に合わせて、できうる限りの最適の取り組みをしようとするすることで、保護者の不公平感も緩和されるでしょう。そして、先生方自身も、不安と疲弊の中で、同僚とLINEなどでつながって、「自分だけじゃないんだ」と思えることが、元気や安心につながるでしょう。自分たち自身がつながるのにオンラインのツールを使うことで、オンラインへのハードルも下がり、子どもや家庭とのつながり方についてのアイデアも生まれてくるでしょう。学校改革一般のセオリーでもありますが、「教師の学びと子どもの学びは相似形」です。そうして、安心を届ける心温まる取り組みを、さまざまなレベルで立ち上げていくことで、自分たちでも現状を動かせるという手ごたえが得られるのではないのでしょうか。

秋入学案も検討されていますが、9月以降も感染拡大の断続的長期化する可能性を鑑みれば、秋入学になったとしても、秋まで何もしないのではなく、秋入学と仮になってそこから一年で何とかすると考えるのでもなく、すぐにでも上記のような取り組みを進め、もしも来年の9月までこの学年が延長されたなら、時折さらなる休校にも直面しながら、その一年以上の期間をかけてじっくりと、子どもたちとつながりを構築しつつ、内容を指導していくことが大事でしょう。

今改めて、学校の教育機能と保護機能が問われていますが、2月末の休校以降、社会が実感したのは、学校の保護機能の潜在的な大きさであったと思います。安心とつながりを保障することは、ケ

アや保護の機能の核心であり、心を通わせる取り組みを積み重ねていながら、他方、教育機能という点では、子どもたちにただ課題やコンテンツを届けるだけでなく、それらに持続的に取り組むようなしなやかさを考え、学んだことを表現する機会を生かすなどして、子どもたちの中になにごとかを残すことが重要です。特に、子どもたちの可能性を信じて、一緒にこの事態を乗り切っていこうと呼びかけたり、活動を提案してみたり、思い切って任せて挑戦させてみたりすると、子どもたちは教師が思っている以上に応えてくれるでしょう。いずれにしても、子どもたちの想いに寄り添い、その立場から考えていくこと、そうした教師の仕事の原点を再確認していくことが大切です。

今のように「小さな学校」を強いられている状況では、「脱学校」的な発想で、一度、いまの学校をゼロベースで考えて、学校や公教育成立以前の家庭学習による私教育にまで戻って、そこから学び舎を構築し直していくことも考えうるかもしれませんが、そこに待っているのは、むき出しの消費社会的なコンテンツと、ネット環境や親のつながりやリソースの差にもろに規定された社会の分断と、一定の子どもたちの、学びのコミュニティからの疎外ではないかと危惧します。世間の学校不信、そして上に伺いを立てることの連続で委縮してきた学校現場、そのがんじがらめで挑戦する勇気を萎えさせられてきたこの状況をこそ、打開できたなら、そこにはもっと自由で、本当の意味で子どもも教師も学びに向かえる学校の可能性が拓けるのではないかと。そこに、公教育全体がオンライン化に取り組むことが生み出す、人的、物的な巨大なリソースが加わることで、スマートに実装した、教育機能と保護機能において「大きな学校」が立ち現れる可能性を期待しています。特に、いま苦境に立っている多くの公立学校は、「眠れる獅子」のような可能性を秘めていると思います。

安易に脱学校という名の教育の私事化・市場化の方には行かず、学校という制度とそのキャパシティを信頼する方向で、教育の公共性と公平性の実現の方向で踏ん張ること、「どうせ動いても動かなくても批判されるなら・・・」と、委縮と不信の連鎖から挑戦と信頼の連鎖へと、一步を踏み出すことを願っています。

※この小論は、さまざまな声や取り組みに触発されてまとめたものですが、とりわけ、「こころの温度」

という視点への着目などは、香川県高松市教育委員会の河田祥司先生との議論を、また、学校現場の現状については、盛永俊弘先生が主宰されている、学校改革フォーラム（SIF）での議論を参考にさせていただきました。